

当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

第2回（通算第15回）

基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー

日時：平成24年7月4日（水）14:00-18:00

場所：AA研セミナー室（301号室）

発表者と発表題目：

1) 伏木 香織（AA研ジュニアフェロー）

「シンガポールにおける人々の移動と記憶の再構成—音と芸能をめぐる人々と海外ネットワークの関係性」

2) 櫻田 涼子（AA研ジュニアフェロー）

「マレー半島の広告記事にみるメディアの変容と華人社会」

要旨：

1) 「シンガポールにおける人々の移動と記憶の再構成—音と芸能をめぐる人々と海外ネットワークの関係性」

伏木 香織（AA研ジュニアフェロー）

本発表は、シンガポールという都市を舞台に、移動と移動する人々をどのように語ることが可能なのかという問題について、音世界（音風景、**soundscape**）という切り口から、語り口そのものの抱える問題点を明らかにするとともに、どのように語ることができるのかを探る試みである。東南アジア諸地域、特にマレー半島やインドネシアなどの社会や芸能を論じ、語る際に、各「民族」、「華人」などの括りや、それに基づく文化活動を行う人々の「まとまり」を基本概念とすることは、常套手段である。シンガポールの社会や文化を論じる場合、先行研究の多くは、そのまとまりをエスニシティや華人方言グループ、寺廟団体などとしてとらえてきた。それぞれ他称であろうが自称であろうが、まとまりを形成する人々もまた、自らのアイデンティティをそのまとまりに求め、表現することも多い。しかしながら、その実態はゆるやかなまとまりと移動の連鎖なのであり、そのネットワークなのである。本質主義的にまとまりを「コミュニティ」として語ることはできないが、現に「そこにある」人々の暮らしとまとまり、それを本質主義に陥らず、エスニシティやナショナル・アイデンティティの問題に還元せず、いかに語ることが可能なのか。

本発表では、具体的事例として、シンガポールという都市空間に、しばしば社会問題化し、宗教、文化、教育政策ともリンクする形で現前化する音世界が生じる場とそれを作るまとまりをとりあげた。とりあげたのは、喧噪の音のスペクタクルとなる遶境、さまざま

な場面に使われる潮州由来の音楽である潮州鑼鼓、各寺廟の祭礼や旧暦 7 月には路上に野外劇として出現することもある各種戯劇、シンガポールでは通年で行われる路上歌謡ショーの歌台、主としてアマチュアを中心として活躍し寺廟の祭礼や葬礼などの際にも使われることがあった音楽の各種団体である。HDB フラットの立ち並ぶ、人々の生活空間に突然、仮設テントの形で出現する宗教団体とともに、各種の音楽の爆音と人々の叫びが通い合う遶境は、さまざまな由来をもつ人々、神明、音楽が交錯する場であり、主催者がある特定の寺廟であったとしても、それに関連する他の寺廟やその音楽隊、童乩とそれらに降臨する神明たちは、ひとつの集団に帰することができない。潮州鑼鼓は「潮州の」芸能とされながらも、シンガポールでは福建系の寺廟や遶境などにおいて、福建語で「公館」と呼ばれる廟堂音楽として使用されるほか、「潮州系の」葬送儀礼にあつては、花燈隊のなり手（女性）を国内では失い、エージェントを通して中国本土からの留学生を日雇いのアルバイトで雇い、彼女たちへの指示や彼女たちとのやりとりは普通語で行われる。また音楽団体内部での音楽的レパートリー、演奏技術の習得に関しては、国内だけではなく、「文革後の中国」の状況をかんがみて、シドニーやサンフランシスコ、パリなどの鑼鼓団体と情報やレパートリーの交換が行われる状況にある。各種戯劇は 1990 年代後半を境に、国内のプロフェッショナルな団体は急速に衰退し、種類によっては、香港や中国、インドネシアやマレーシアといった海外とのつながりがなくては上演もできない状況にある。またマレー半島で旧暦 7 月の「マンダリン」の野外歌謡ショーとしてしられる歌台は、映画の影響からシンガポール政府にも認められるようになり、「旧暦 7 月の「福建語」歌謡を含むシンガポール固有の歌謡ショー」という演出でもって、「シンガポールの文化」化が進められている。しかし実際の舞台には、シンガポール人の歌手以外に、中国や台湾、マレーシアなどからの様々な出自の歌手たちが多くいて、旧暦の 7 月の出稼ぎの場になっているし、福建語が得意でない歌手ですら、メモを片手に歌う福建語のレパートリーの多くは 1930 年代の台湾にうまれた「台語歌謡」なのである。アマチュア団体が室内楽として伝えてきた音楽の一例としてとりあげる南音は、2009 年に中国泉州の芸能としてユネスコの無形文化遺産として登録された芸能だが、シンガポールの音楽社は、「東南アジアの南音」を追求し、「国際南音大会」などを積極的に行ってきたほか、無形文化遺産の選定登録にも大きな影響を及ぼしてきた。

このような事例を通して確認できるのは、リアルに「そこにあるもの」ものとは、浮動する人とも、そのまとまりである、ということである。しかも空間と時間概念を含むものとしての音世界（soundscape）を形成する音を使ったさまざまな表現は、その上演、実現に際し、記憶（公、個とも）を集合し、確認し、意識的にももの化したうえで資源化した Heritage として、人々の前に現象する。つまり、音世界が示すものとは、個と公が交錯したものとして脈略に応じて形成される集合的記憶と、時空間において浮動の、脈略依存のゆるやかな連携なのである。このように現実の「そこにあるもの」を認識したとき、書き手としてのわれわれは、浮動する人とものをどのように描くことが可能なのだろうか。も

はや、Halbwachs の古典的な集合的記憶に関する記述には、現実を描き出す可能性を見出すことはできないのである。

*本発表では「書く」という行為そのものに対し、「書く」必要があるのかというメタ化した問題は棚上げし、「書く」こと、認識することを前提に問題を想起したことをお断りしておきたい。

2) 「マレー半島の広告記事にみるメディアの変容と華人社会」

櫻田 涼子 (AA 研ジュニアフェロー)

本発表では、1929年にシンガポールで創刊され、今日のマレーシアで発行される日刊華字紙『星洲日報』に掲載された広告記事の形式、内容の通時的变化を検討することにより、マレー半島の華人社会がいかに変容してきたかを明らかにした。

本発表が分析資料として扱った「広告記事」とは、主に個人が規定された料金を支払い新聞会社に掲載を依頼する告知を目的とする広告記事を指す。伝統的に、マレー半島で発行される華字紙にはこのような広告記事が数多く掲載されてきた。それは例えば、葬儀案内を兼ねた死亡告知記事（訃告）や、死者が生前に所属していた社会組織により掲載される弔意記事（挽詞）、遺族による葬儀参列に対する謝意の表明記事（泣謝）、結婚報告記事（結婚祝賀記事）、親子関係や兄弟関係などの終焉を公にする記事（脱離関係）、新事業・新店舗の開業を祝う記事（開店祝賀記事）、州王スルタンなどによる称号賦与や学位取得、昇進などを祝う記事（榮譽称号祝賀記事）など実に多岐に渡る。

本発表では、マレーシア国立図書館・シンガポール国立図書館に所蔵される『星洲日報』の創刊年1929年、1935年、1941年、1950年、1960年、1968年、1970年、1980年、1990年、2002年、2012年の各1ヶ月分（1月）のマイクロフィルム、及び調査地のインフォーマント家庭に保管されていた広告記事を調査し、それらを9つのカテゴリー（訃告、挽詞、泣謝、訃告更生、年忌供養、結婚祝賀、榮譽祝賀称号、開店祝賀、通知）に分類した上で、その数量的変遷と記載内容の変容を明らかにした。

2000年代以降の広告記事の約9割が死に関する記事であったため、独立以前のマレーシア社会の主たる関心事は死であると仮定した上で調査を実施したが、調査・分析の結果から明らかになったのは、独立以前のマレー半島の華人社会では、他者と他者を結び付ける婚姻の方が重視されていたということである。

例えば、結婚報告記事の掲載数の変遷は、1935年の59.6%をピークに1960年代までは40%を占めていた。しかし1980年代になると10%を下回るようになり、2012年には0.4%と極端に減少した。一方、訃告や挽詞など〈死に関する記事〉の掲載率は1929年にはわずか1%、1941年から1970年までは30%前後を推移しており、その掲載数はさほど多くなかった。しかし、1980年以降には全体の半数を占めるようになり、2000年代になると80%

を占めるまでに増加していた。このように広告記事の掲載数を比較してみると、かつては結婚が重視されていたが、今日では死と葬儀が重視されていることが明らかとなった。

また、記事を掲載する主体も大きく変化していた。例えば 1950 年代に掲載された榮譽祝賀記事において、榮譽を祝うのは祝われる当事者が所属した同郷団体や同業団体などの社会組織やその友人たちであったが、2000 年代になると称号授与を祝う主体が家族へと変化していた。同様に、1970 年代までは死者の所属する同郷団体や同業団体などの社会組織が中心となり葬儀委員会が組織されている様子が訃告から読み取れたが、1980 年代以降訃告で葬儀を通知する主体は家族・親族が中心となっていた。

以上の傾向から、死に関する記事の増加は極めて今日的な事象であることが明らかとなった。また広告記事のカテゴリー別の掲載割合、記載内容についても時代による大きな差異が認められた。2000 年代になると親族（女性傍系親族も含む）を中心とする訃告がほとんどとなり、かつて見られた社会組織や業縁による広告記事はあまり見られなくなった。とはいえ、すでに移民社会とはみなされなくなって久しいマレーシア華人社会において、親族以外の社会関係である互助組織などの社会関係がもはや重視されなくなったというわけではない。かつて訃告で重視されていた男性が所属する社会組織を中心とする社会関係は、今日、家族・親族の関係性が表明される訃告、それ以外の人間関係が表明される挽詞とに分離され、死という局面に故人の生前の社会関係を具体的に可視化させる役割を担うようになったのである。このようにして、本発表ではマレーシア華人社会のあり方が、社会組織から家族を中心とする関係へ変化しつつあることを、広告記事の分析を通じて指摘した。